

JFTDから消費者への情報発信の場 「フラワードリーム2009 in Tokyo」

JFTD・花キューピット協同組合 常任顧問
石川 君子

JFTD（社団法人日本生花通信配達協会）は、平成21年7月4日（土）から6日（月）の3日間、日本の文化経済の中心地東京から、様々な切り口で花文化を発信しようと「フラワードリーム2009 in 東京ビッグサイト」を開催しました。花業界関係者はじめ一般の方々に広く開放し、約3万人の方々にご来場いただきましたので、開催に至った経緯とその概要を紹介いたします。

1. 開催までの経緯

JFTDは、昭和28年に遠隔地の花贈り事業を行う団体として設立され、日本における花贈り文化の普及、フラワーデザイン技術の向上等に取組んでまいりました。その後、民間企業等による花贈り事業の普及に伴い、平成13年に生花通信配達事業を公益法人JFTDの事業から切り離し、花キューピット協同組合を設立・移管しました。現在は、公益法人（特例民法法人）として、JFTD学園日本フラワーカレッジを中心としたフローリストの育成、各種競技会や研修会の開催、花育、還暦を赤いバラで祝うハッピーローズなどの新たな花文化の発信等、花き業界の活性化に向けて取組んでおります。

JFTDの会員は生花専門小売店として花き消費の最前線にありますので、此処10年ほどの、業務用需要、稽

古花、お見舞い花等の大幅な減少や、若年層、特に、子供たちの花離れ・土離れ等の消費動向の変化を身を持って感じ、何とかしなければいけないとの危機感を強く持っておりました。

JFTDの故鈴木雅晴初代会長は、花き業界の拡大・発展のためには消費宣伝が不可欠であると考え、昭和40年代に、生産、市場及び小売の三者一体となった取り組み「千分の一構想」を提唱しました。残念ながら、当時花き業界は成長期にあり、生産及び市場の理解は得られませんでした。しかし、JFTDは、内部での議論を重ね、単独で宣伝目的の会費を徴収し、積極的に宣伝活動を展開することとしました。以来、現在までに二百億円を超える宣伝費を費やして花文化の創造・普及・拡大に努めてまいりました。フラワードリームはその一環として、全国4,000の会員の夢が形になったものです。

2. 会員主役から消費者主役へ

生花通信配達事業は、お客様からいただいた注文を遠くの他の会員店に取り次ぎ、新鮮なお花を手作り手渡しするというサービスですので、会員間の信頼の醸成と技術の向上が必要不可欠です。そのため、JFTDは「親和と誠実」という言葉の下に、56年間に亘り毎年全国大会を開催し、会員の親睦と技術の向上に励んでまいりました。その結果、会員間の素晴らしい絆と世界に誇るフラワーデザイン技術がJFTDの宝として蓄積されました。この宝を活かして、少しでも多くの方々に花の美しさ、楽しさ、癒しの力などを伝える場を作りたいと2年ほど前から構想を練ってまいりました。

丁度、平成18年5月に公益法人制度改革3法が成立し、平成20年12月1日から施行され、「民による公益の増進」が打ち出されたことが後押しとなりました。公益法人の認定を目指すJFTDは、従来の組織及び事業を大きく見直し、会員に限定せずに幅広い参加を求め、花文化の



オープニングのテープカット

普及と花き業界全体の活性化を推進する方向に舵を切りました。



ジャパンカップ作品

3.開催結果

幅広く花き関連事業者、消費者等を対象にした大規模イベントを企画するのは、JFTDにとって初めての経験であり、試行錯誤で担当者は大変苦労しておりました。結局、JFTD、花キューピット協同組合、株式会社日本フラワー振興協会、株式会社i879のグループ企業あがての実施体制が生まれ、猛烈な追い込みで開催に漕ぎ着けました。

内容については、2009年から2013年までの5年計画で順次充実を図ることとし、初年度はできることから始めることとしました。テーマは「新しい日本の花文化の創造と提案」に決まり、二部門構成としました。第一部は、花文化の担い手の育成部門として、ジャパンカップ、JALCUP、花育ワークショップ、セミナー、人の一生を彩る花の特別展示(全国56の支部から1点ずつ商品提案)、還暦を赤いバラで祝うハッピーローズ・アワードの授与、ジャパンカップの入賞者等によるフラワーデモンストレーション、種苗会社、産地、生産者等による新品種紹介及びフラワーマーケット。第二部は、花文化を支える技術発展として、商品(資材)見本市、プリザーブドフラワーコンテストとなりました。

企画を進めるうちに、オランダ国際球根協会のユリの展示やミズリリーの表彰が併催されることとなり、また、東京農業大学の進化生物学研究所の展示、生き物文化史学会の展示など、内容が膨らんできました。

準備が進む中、皆が不安になったのは、会場の東京ビッグサイトは、交通の便が良いとは言えず、果たして初めてのイベントに皆様が来て下さるのかどうか、ふたを開けたら閑古鳥だったらどうしようと、会長は、夢でうなされたそうです。

当日は、深夜の0時から準備を開始し、一同ハラハラしながら待ちましたが、次々と来場者が並び、定刻には押すな押すなの人垣ができ、開場後も1時間2時間と途切れることなく人並みが続き、感激で言葉が出ませんでした。

4. 主なイベントの内容と結果

フラワードリームの中心イベントであるジャパンカップは、1年間かけて全国の予選会を勝ち上がった86名(店)により、競われました。今年は、他組織にも参加を呼び



プリザーブド優勝作品



花育ワークショップ

かけ、2組織から2名の推薦がありました。来年からはより幅広く、予選会からオープンにしていこうとしています。優勝者には、内閣総理大臣賞が贈られ、5年に1度のグランドチャンピオン大会への出場資格が与えられます。グランドチャンピオン大会で優勝すると、ワールドカップへの出場権が与えられ、出場に際しての経済的支援が受けられます。

JALCUPは、どなたでも参加できるコンテストとして、JALCUP実行委員会の主催で開催されました。副賞の世界中どこへでも行けるペア航空券の効果か、「旅と花」のテーマに293名の応募があり、審査委員長の講評によると、本年は素晴らしくレベルが高かったとのことでした。

JFTD学園が担当した、七夕の花飾りをつくる花育ワークショップは、5回行って、すべて満員で、合計120名の参加がありました。また、花育を進める上での基本的考え方について今西浩子氏のセミナー、花店向けの葬儀、水揚げに関するセミナーも開催されました。

オランダ国際球根協会主催のミズリリーの授賞式にはオランダ大使がご臨席され、その後、会場をゆつくりと回られ、作品の講評や、出展者と意見交換されました。大使の感想は、若い人、家族連れが沢山来場されていて素晴らしい、今後のターゲットは、子供たちというアドバイスをいただきました。

県の経済連のブースでは、3日分用意してきた花が、1時間で売り切れてしまい、急遽市場で仕入れたそうです。埼玉県の手生産者のグループは、将来の顧客を獲得するとのテーマで、管理のしかたを丁寧に説明し、大変好評でした。多少強気の価格設定にもかかわらず、よく売れていました。

花関連資材の「第1回フローラルサプライション(FSS)」

及びFSS主催によるプリザーブドフラワーコンテストが開催されました。大変繊細な作品が多数出品されました。

3日目は、月曜日で午前中だけのため、花育ワークショップも舞台イベントも用意していなかったのですが、朝から続々とご来場があり、急遽、舞台でのデモンストレーションを行いました。販売用の植物も、早々に完売し、ホッとしました。

4. 来場者の反応

今まで毎年会員のための全国大会で見慣れていた作品が、多くの消費者に驚きと感動を与えることを知りました。3日間通われた一般の方も多数おられたようでした。質の高い花文化を発信できたのではないかと少し安心いたしました。

5. 来年へ向けて

心配していたものの、終わってみると予想以上の盛況で、大きな反響をいただき、インターネット上には写真付きで多くの書き込みがなされ、テレビ局、新聞社、民間企業、団体、生産者等から来年に向けての参加や協賛などのお話をいただき、一同安堵いたしました。来年は、7月の3日から5日まで、同じ会場で今年の倍のスペースで開催するよう準備を進めております。是非、皆様のご来場、ご参加をお願いいたします。



ミズリリー授賞式